

Fukapon

絵: だれもない

それりゆ (後)

COMMUNITY TECHNOLOGY PREVIEW

本作は未完成のプレビュー版です。
お気に召さぬ点など、ご意見いただけると嬉しいです。

「だ、ダメだよつ、桐子っ。」

「何がダメなの？ こんなに気持ちよさそうな顔してるのに。」
秋深まる中、暑くもなく寒くもなく、心地よい日の光が降り注ぐ昼下がり。

無味乾燥だけど、開放的なその平面に、彼女たちはいた。

「だ、だって、そんな、私は……。」

「ハッキリ言わないとわからないなあー。」

彼らの視界には、彼らと高くなつた空だけが映り。

それはまるで彼らだけの世界のようにだつた。

「桐子が、その、えつと、その……。とにかくダメつ、そこでストップ！」

「なによつ、私の身体を借りておいて、賃借料を払わない気？」
南ヶ丘高校普通教室棟の屋上では今、ちよつとした惨事が起こつていた。

とは言え、惨事だと思つてゐるのは膝の上にいる女の子一人と言つた風情だが。

「うー、そんなこと言う桐子嫌いだよう。」

もう一人の女の子の膝の上に座り、寄り掛かるようにして身体を預けている女の子。佐川綺月さがわきづき、高校一年生、十六歳。身長こそ並よりも高いが、華奢な体つきと幼い顔立ちで、身体の預け先である女の子とは先輩後輩のように見える。ウエーブのかかったダークブラウンのセミロングヘアは、他と不釣り合いに大人っぽい。だから余計に、背伸びしたい盛りの可愛い子に見えるてしまうのかも知れない。

そんな可愛い彼女が、ちよつとふくれつ面で駄々をこねていたとしたら。それは相当に可愛くて、もつともつと悪戯したくなつてしまう。

「ふうん、じゃあ、バイバイ。ほら、どこか行きなさい。」

もう一人の女の子は胸に抱えた綺月から手を離し、しつしつと振つて追い払う動作を見せている。そして自由になつたはずの綺月を見下ろしながら、にやにやしている。

森田桐子もりたとうこ、高校一年生、十六歳。よもや綺月の同級生とは思

えない、研ぎ澄まされた顔と、幼い丸みとはとうの昔に決別した身体を持つ美少女。背中までまっすぐ伸びた黒髪も手伝つて一見清麗な風姿だが、どうにも似つかかわしくないのは綺月を収めたその胸である。収めたという表現が適切な絵を作るそれは、人並み外れて豊かだつた。それ故に心地よく、同性の綺月ですら離れがたいものらしかつた。

「わ、わかつたよお。桐子の好きにしていいいから、ね、もう少しこのままでいさせて。」

「やたーつ。じゃあ、好きにしちゃうつ。」

桐子の両腕は再び綺月を抱き、彼女の頭を胸に飲み込んだ。綺月は桐子の胸の中で顔をふるふるつとさせると、温かそうな心地よさそうな、薄目がちな顔になつてゐる。

しかしその頬が薄く紅で染まりだしたのは、心地よさのためだけではないのだろう。桐子の右の掌がゆつくり、ゆつくりと、綺月の身体を這い出す。胸元からなだらかな山を登り、降り、鳩尾からおへその真上を通過する。頬の紅は色味を増して、綺

月の秘めたる心中を赤裸々に曝していた。

「あつ。」

「ふふつ、綺月ったらなんて声出してるの？」

にやりと笑いを深めた桐子は、手の動きも合わせて深めていく。ついには綺月の鼠蹊部に達し、手首をひねるように指先を秘部へと向けた。刹那。

「ひゃつ、もうつ、やつぱりやだよ。桐子のバカつ。」

縮みきつたバネが放たれたかの如く、綺月は桐子の身体を離れた。

「あつ、ちよつと、待ちなさいよつ。」

「待たないつ、知らないよ、もう、桐子なんてつ。」

彼女を抱いていたときのまま、鳶座りで手を伸ばしてくる桐子を背に走り出す。いくら広い校舎の屋上とは言え、綺月はものの数秒で屋上唯一の構造物、出入り口と到達。扉の向こうへと足を踏み入れていた。

「あー、こらー、逃げるなーつ。」

そして桐子の叫びは、重たい鉄扉に阻まれて綺月に届かなかつたろう。

「もう、何よつ。ちよつと悪戯しただけじゃない。」

優美なお姉さんは全く同じ姿形でそこに座っていたが、今やへたり込んでいると言った方が相応しい落ち込み具合。「あーあ」とため息をつきながら、パタンと背中から倒れ込んだ。天高く浮かぶ雲の、真白が眩しい。はずだったのに、視界には突

然影が落ちた。

「今のはお前が悪いぞ。」

屋上には桐子と綺月の他に、もう一人、秋の日差しを楽しんでいるものがあつた。

「なんでよ？ あんなのいつものスキンシップじゃない。女の子同士なら当然でしょ？」

「俺は男だからハッキリ言うけどな、あんなことされて涼しい顔をしていられるヤツはいない。」

強い口調で言い切った男の子は、すらりと伸びた長身を持ち、細身でありながら鍛えられた風のある鋭さを備えている。その鋭さはおそらく、隙のない顔つきからも感じられているものなのだろう。明るい日光を浴びてもなお浅黒いその肌、短く無造作な髪、そんなワイルドな造形すら制してインテリめいた雰囲気作る声と口調が、今の桐子をひどく苛つかせている。

「るっさいわね。ヒロは男だからそーゆー邪なことを考えるの。」

「そうだな。経験のない女に、男のことはわからんな。」

「ちよ、ちよとつ、何それ？ 私をバカにしてるの？」

「さあな。」

桐子にしてみれば悔しいほど、涼しげな顔の青年。穂積博徳、ほづみひろのりヒロと呼ばれる彼もまた、高校一年生。桐子や綺月の同級生だ。そして三人は、友人というの関係にある。だからこそ、こんな小競り合いもいつものことなのだろう。

「綺月のことなら私が一番よくわかつてるに決まってるの！」
「それは否定しない、桐子と綺月は半ば生まれたときから一緒

「なんだからな。」

「そ、そうよっ。」

それ故に博徳は、この場の収め方も心得ていた。

「なら、早く仲直りしてこい。これからも一緒にいたいんだろ？」

「言われなくてもわかっているわよつ。今から行くところだったのに、ヒロが引き留めるから行けなかつたのっ。」

「はいはい、行つてらっしゃい。」

博徳の送り出す言葉を聞くか聞かないかのタイムリングで、桐子は跳ね起き、風のように屋上から消えていった。

「ぼつんと残された博徳は天を仰ぎ、思うところありという顔だ。」

「でもよ、すべてがわかつてるつて訳じゃ、ないと思うんだよな。」

虚空に残された彼の言葉は、誰に届くこともなく、秋風に消された。

階段を一気に駆け下りてきて息を切らせた綺月は、冷たい廊下の壁に背を凭れ、早鐘を打つ胸に手を当てた。

「こ、これは、走つたからであつて……。」

誰にでもなく言い訳をする彼女は、その鼓動が走り出す前から高鳴っていたことを、十分に承知していた。

大切なところを誰かに触れられてしまう感覚。スカート越しとは言え、年頃の綺月が抑えきれなくなるのは当然のこと。け

れども抑えきれなくなることを彼女は恐れ、お気に入りの桐子の膝の上をも逃げ出してきた。

別に桐子のことを特別意識しているわけではない。けれども、いや、だからこそ、あんなことされたらドキドキしてしまう。

だつて、今まで、あんなことはなかつたんだから。綺月はどう思つていなくても、桐子が特別に思つていたらどうしよう。

でも、今日みたいな、綺月に言わせれば過ぎた悪戯がたまにある程度だから、単純に今までのじゃれ合いの延長なのかも知れない。綺月一人で考えたところで、その答えは出ようもなかつた。

仕方なく今回も、綺月は答えを出すことを諦めた。そう、ここ数ヶ月で何度か同じようなことがあつた。そして毎回、同じように綺月が桐子から逃げ出している。

「ふう、だいぶ、落ち着いたかな……。」

顔の赤みも引いて、いつも通りに落ち着いた旨の動きになつたことを確認して、綺月は壁から離れた。寄り掛かつたときには冷たくて心地よかつたけれども、すっかり彼女の熱に暖められてしまつたのだらう。壁から離れると、逆にすうつとした。

今日は土曜日だ。昼下がりの学校はすでに生徒もまばらで、もはや用がない綺月も帰ろうかと考えている。けれども、桐子を置いていくのはなんだか気まずい。だから今回も、ふらふらと校内を歩いているうちに、桐子が後ろから声をかけてくれるのを待つていた。

「私、ずるいよね。気になるのなら、聞けばいいのに。」

桐子が何を想い、綺月に触れたがるのか。ハッキリとした答えは出せなかつたけれども、綺月にはちよつとした心当たりがある。でもそれは大変な自意識過剰で、正解にはほど遠いともわかつていた。だつてそんなの、現実では起こるわけがないんだから。綺月と桐子は幼馴染みで、ずつと仲良しで、それ以上ではないのだから。それでも、あの日から、綺月は変わった。だから、桐子も変わったのかも知れない。

まだ中学生だつた頃。綺月はある日の放課後、教室のベランダでぼーっとしていた。桐子と一緒に帰る約束をしていたのだが、その桐子が職員室に呼び出されて、戻ってくるのを待っていたのだ。

綺月たちの教室は一回の一番端つこで、ベランダと呼ばれていたそれは、よく言えばテラス、ただ単に地面から、裏庭から一段高くなっているだけの場所だつた。それは綺月にとつて、不運と幸運、そして大きな変化のきつかけになる。

「もしよかつたら、その、付き合つてくれませんか。」

ベランダからは死角にこそなつていたが、ごく近くの校舎影から、おそらくは左手の角の向こうから、男の子の声が聞こえた。声に聞き覚えはなく、またか、程度に綺月は思いながらこの成り行きに聞き耳を立てる。

学校という空間は当然のことながら、いつどこにいても、誰かが通りかかる可能性がある場所だ。そもそも先生によつて生

徒が管理される場所なのだから当然であり、これだけの人間がいたら、それぞれが様々なところを歩き回つていて当然だ。しかし、これだけ大きな建物だからこそ、偶然あまり人目につかない場所も生じる。それが、綺月のいるベランダから見えて左手の、校舎の側面に当たる場所だつた。故にここを恋の告白に使う生徒が少なくなつた。残念ながら、ほとんどの生徒が、あの教室のベランダからその声がよく聞こえてしまう事実は知らなかつたので、告白に最適の場所だとだけ思われていた。今度の男子生徒も、隠れて告白しているつもりなのだろう。

綺月に立ち聞きの意味などないが、何とはなしにベランダにいたことが少なくなつたため、数回は悲喜こもごもの現場を聞いてきた。勝率は五分五分、さて今回はどうなるかな。多少の興味は否定できないが、ただの暇つぶしだつた。

「ごめんなさい。お受けすることはできないわ。」

その声を聞くまでは。幸いにして告白を断つた声は、綺月が想つていた先輩の声だつた。学年が違い、決まつた接点があるわけではなかつたため、声だつて頻繁に聞いていたわけではない。それでも、間違いない先輩の声だと綺月にはわかつた。

他人事だつたイベントが、一気に自分の身の上のことにように感じられ、二の句を待つてドキドキしてしまう。先輩が自分以外の誰かと付き合う、最悪の事態は避けられたけど。だからつて喜べやしないんだと、綺月にはわかつていた。

「あのね、あなたのが嫌いとくじやないの。その、ハッキ

リ言つちやうとね、私、女の子が好きなの。だから、あなたを好きになることはできないから。」

でも、それは誤解だった。

佐川綺月は、改めて、恋をした。

この恋が叶いますように。本気でそう願う、恋をした。

あの瞬間から、二年が経つ。

その間に桐子は、私のためにいろいろしてくれた。ちよつと無茶苦茶だったけど、今では先輩の前に出てそれなりの女の子でいる自信もついた。

そう、いろいろしてくれたんだよね。綺月は二年間の思い出の欠片に触れて、自らの考えに過ちを見いだした。

「そうか、桐子は変わってないんだな。私が私になつたから、違つて見えるのかな。ごめん、あとで謝るから。」

冷たく光るリノリウムの床に独りごちて、今度はいつも取り、ゆつくり、けれども無駄なくすらりと歩き出した。教室に鞆を取りに行つて、桐子に電話して謝つて、一緒に帰ろう。放課後に学校に残る生徒として、桐子の友達として、綺月はごく普通の予定を立てていた。

そしてまずは版を取りに行くべく自分のクラス、1-Bに辿り着き入り口の引き戸を開ける。と。

「あつ。」

「……………っ!」

「……………!!?」

ちよ、え、あ? 何? えつと、それつて…………つ。

言葉にできないどころか、適切な思考もできていない綺月の前に広がる光景。予想だにしなかつた光景が、彼女の前に現れた。

制服の胸部をはだけた女子生徒と、その胸には手を伸ばしている男性教諭。

机の上で上半身を仰向けにした女の子と、今まさに覆い被ざらんとする男。

目が合つてしまつた笹原先輩と、強い死線を突き刺してくる
柚木先生。

「きゃつ、ちよ、やだっ!」

「えつ、あ、ああ、いや、その」

「やめてつ、お願いだからやめてください。」

「さ、笹原、お前さつきまで」

「やだ、ダメ、どつかいつてつ。」

手足をバタバタさせている先輩と、明らかに狼狽している先生と。

そんな痴態を目の当たりにした、綺月。

綺月はその場にとつて明らかに異質で、綺月にしてはもつとで理解できる場ではない。思いを寄せている先輩が襲われているところまで頭は回らず。男女が目の前で大変なことをしている、それだけで彼女の思考回路は焼き切れた。

そして先輩の声をいくつか聞いたあたりで、彼女は気を失い、

教室の入り口に崩れ落ちてしまった。

綺月の視線が失われたと同時に、先輩、笹原紅深ささはらくみは鋭く右脚を蹴り上げ、つま先は目の前の男のおとがいを捉えた。次の瞬間、男はよろけながら後ずさった。同時にすつくと、寸分の震えすらなく上半身を起こした彼女は、落ちていた正確無比な呼吸で言葉を口にする。

「いつまでその粗末なものを出してるのかしら。」

まるでそれは、恐怖がひたひたと迫るかのような声色を伴っていた。

今にも交わらんとする距離から、一瞬でその小さな身丈一つ半の間合いを作った彼女は、さつきまでの女の子ではない。男に組み敷かれ、襲われていた女の子。そんな雰囲気は全くないどころか、今や彼女の威圧感ゐあつかんは男を圧倒している。

「え、あ、そ、その」

「早くしなさいと言つてあげてるの、わかる？」

「いやだって、お前」

何かしらの反応を返している男の声など意に介さず、彼女はブラウスのボタンを留め直す。その上に着たままだったブレザーの衿を再び整え、さらにボタンを留めると。綺麗すぎる冷淡な表情のまま、口を開いた。

「せつかくの忠告を無視すれば、それ、二度と使えなくなるわよ？」

自身が忠告と呼称した警告が脅しではないと伝えるべく、するりと机の上から滑り降りて、男に歩み寄る。動きはまるで精

密機械のように正確で素早く、右手はいつの間にも男の性器をとらえていた。

「早くしなさい。それとも、私の手でいきたいのかしら。」

「あ、ああ、わかった、わかったから放してくれ。」

「つたく、とろいヤツね。」

あわてふためき警告に従おうとする男の性器を、彼女はことなげに放った。

男はそのことに相当安堵したようで、己の大切なものをそくさとストラックスにしまい込んでいた。そして次は何をされてしまうのかと怯えた目で彼女を捉え続けていた。

しかし彼女はすでに男になど興味はないらしく、その場にいるもう一人の女の子、綺月の元へ歩み寄り、抱き上げようとしている。

「ごめんさいね。今、保健室に連れて行つてあげるから。」

全身の力が抜け、くつと横たわつていた綺月に、彼女は語りかける。

もちろん応答はなかったが、代わりに綺月を迎えに来たはずの声が、紅深の頭上、教室入り口で響いた。

「ちよ、ちよつ、どしたの？」

綺月の後を追いかけて教室にやってきた桐子には、現前の状況が今ひとつ理解できないでいた。

不自然な格好で横たわつた綺月。綺月を心配そうに見つめ、頬に手を添える彼女の憧れの笹原先輩。奥にはなぜか、怯えるような表情をした柚木先生がいる。

「あ、あの、ごめんなさい。事情はあとで説明するので、佐川さんを保健室まで連れて行ってくださいませんか。」

紅深は視線を綺月から外し顔を上げ、桐子にお願いをする。深く吸い込まれそうな、大きくて真つ黒な瞳。これ以上はないと言うほどのコントラストを生み出す、真つ白な肌。この状況の原因を知らぬ桐子は「こんな可愛い人、女の私でも惚れそう」と、この場には似つかわしくない、素直すぎる感想を頭の中に浮かべながら。

「あ、はい、でも、どうしたんですか？ 綺月。」

「気を失っちゃったみたいなの。原因はあとで説明するから、とにかく今は保健室で寝かせてあげて。」

「わかりました。」

当然の疑問を口にしながらも、桐子は何の疑いもなく綺月を持ち上げた。お姫様だっこをしようとしたが、気を失った綺月の頭は重たく、だらんと垂れてしまう。さすがにこれでは首がどうなってしまうかわからない。

「えっと、済みません、私の背中に乗せてもらえませんか。」

「あ、そうね。ごめんなさい気づかなくて。っと、これで、いかしら。」

小柄な紅深であったが、難なく自分より大きな綺月を抱き上げ、桐子の背中に乗せた。

背面にしっかりとした重さを感じた桐子は、特に重さを感じさせることなく軽快に立ち上がった。

「はい、ばっちりです。じゃあ、保健室行ってますね。」

「ええ、お願い。」

一人を背負いながらもいつも通りに歩く桐子に、「へえ、やるじゃない」と吹きながら、ゆつくりと後ろを振り返る。彼女の瞳は鋭さを取り戻し、怯えきり次の行動を取ることができていた男にその切っ先が再び向けられた。

「この下衆が。まだいたか。早く帰って辞表でも用意しておくことね。」

紅深は答えを期待することなく踵を返すと、教室を出て、すで見えなくなった桐子の後を追った。

「北野先生いなかっただから、とりあえず寝かせたけど、大丈夫でしょうか？」

「気を失っているだけだからそれで大丈夫よ、ありがとう。」

存外に落ち着きを払っている桐子に内心驚きながら、紅深は答えた。

すでにベッドに寝かされた綺月の隣で、彼女を心配そうに見つめる桐子。しかし口ぶり同様、慌てた素振りはない。ひよつとして綺月をよく倒れる子なのだろうか。まさかそんな好都合などあるまいと思ひ直し、紅深は慣れから来る落ち着きを持って、綺月の胸元に手を伸ばした。

「あつ、そうですね、リボン解いてあげた方がよかったですよね。ごめんなさい。気づきませんでした。」

「気にしないで、落ち着いて寝かせられただけでも上出来。こ

ういうの、慣れてるの？」

「え、あつ、いや、全然。よくわからないから、とにかく寝かせようって、それだけで。」

紅深との会話で少し平常心を取り戻したのか、桐子は逆に慌て、
 だした。

なるほど、訳がわからなすぎて逆に落ち着いた、と言うより、彼女をベッドに運ぶだけをとにかく完遂させただけなのね。紅深は普通の状況に満足しながら、ベッドサイドを離れ出す。そして、目配せしながら桐子に言った。

「事情を話すから、来て。」

気を失っていて何を言われてもわからないだろうが、その原因を本人の前で話すのはためらわれる。紅深の当然の配慮に、桐子も難なく察しがついた。

「はい。」

紅深の後を追ひ、桐子もベッドを囲む真っ白なカーテンの外へと出て行った。

紅深の事情説明はあつさりとしたものだった。

「私が柚木先生にレイプされているところ、彼女が偶然見ちゃつて。びっくりしたんだと思う、私と目があつた次の瞬間、気を失っちゃったの。」

明快な説明は桐子にもすぐ飲み込めたが、どうしたつて引つかかるのは綺月が見た現場のこと。聞いてしまつていいものかわかりかね、迷つたように視線を泳がせていた彼女に、紅深は

これまたあつさりと言ひ放つた。

「私が襲われたつて点は、あまり気にしないで。それはそれで、別途処理をすべき問題だから。」

「え、あ、でも……。」

見てはいけないものを見るかのように、桐子は上目遣いで、ちらりちらりと紅深の様子を覗っている。女の子にとつて、男の人に襲われることほど怖いことはない、桐子には思えた。それ故にあれこれ考えて、口の開きようがない。まさにかける言葉が見つからない。

紅深がどうかはわからないが、自分であれば純潔が失われかねない状況で、そんなことになつたらもう、どうしたらいいのかわからなくなつてしまふと思う。正しく泣ける自信もない、ただただ、錯乱してしまふんじゃないだろうか。けれども、目の前の先輩は何のこともないかのように落ち着きつていた。男の人になれているのかな？ でも、先輩つて女の子が好きなんじゃ？ それならなおのこと、男の人に襲われるなんて嫌だと思ふんだけど……。

「まあ、……えつと、自己紹介を忘れていたわね。私は笹原紅深、これでも一応三年生。あなたのお名前は？」

「森田桐子、一年A組です。」

「よろしくね、森田さん。それで、あ、そうそう、あなたが驚いて心配してくれるのはわかるんだけど……。結局、未遂だったから。佐川さんという証人もいることだし、悪くはない結論になると思うの。」

うつすらと優しい笑みを浮かべた紅深、その事態を全く理解できない桐子。だって襲われたんだよ？ 危なかったんだよ？ と、桐子の胸には紅深の代わりに怒りが湧き溢れそうですらあったのに。

そんな彼女の思考は口に出ないまでも、どこことなく顔や様子やらには現れていて、逆に紅深が、どうしたものかと少し困ってしまっただけ。そして仕方なしと話を続ける。

「んー、私ね、昔、殺されそうになったことがあるのよ。刃物突きつけられてね。それに比べたらまだマシで、全然落ち着いていられた。ってことで、ねっ？ 気にしないで、もう、森田さんは帰って。」

とても本当とは思えない軽い語気に、とても嘘とは思えない穏やかな語気に、桐子はもう驚くことすらできない。

嘘だろうと本当だろうと、そんなことを言ってしまうって何なんだろう。

真偽を、心理を桐子は評価し得なかったが、「心配させないように」という優しさだけは本物なんだと感じ取った。私に帰りを促すその瞳は、凄く優しく、私だけのことを見ている。だから綺月は、この人を好きになっただんだけだと思ってしまうほど。

あ、そうだ。綺月は先輩のことを好きなんだよね。だったら、私はやっぱり早く帰った方がいいんじゃない？ だって二人きりのチャンスだよ？

今更ながら重大な事実気づいた桐子は、ひとまず紅深の提

案に乗ることにした。

「それじゃあ、その、綺月のこと、お願いします。」

「任せておいて、ちゃんと送るわ。あなたも帰り道は気をつけてね。」

「はい。では、失礼します。」

「ええ、またね。」

保健室を出た桐子は、外光の差し込まぬ廊下を複雑な思いで歩き出した。

でも、彼女はそんな複雑な思いに悩まされるような正確ではない。三歩歩けば嫌なことなど忘れて、とはいかないけれども、すぐに前向きに考えることはできる。

とにかく結局、綺月にとつてのチャンス。しかも綺月と先輩がうまくいけば、先輩だつてきつと幸せになれるよね。それって完璧っ。

さっきまでの難しい顔はどこへやら、今保健室で起きていることが、まるで我が身に起きていることのように頬を綻ばせ、桐子の歩みは弾み始めていた。

一方、保健室では。紅深が一人で綺月を見つめ続けていた。

彼女はまだ目を覚まさない。

「ごめんさいね。」

無表情が有する口から、己にしか聞こえぬようなかすかな声が漏れた。

しかし彼女を思う彼女には、それが聞こえてしまったのだろ

うか。まるで声に誘われるかのように、臉をあげた。

「……………」

クリーム色の天井。真っ白なカーテン。

「……ん？」

やはり白い布団。……布団？

あれ？ 布団つて、私、寝てた？

あ、確かにベッドの上にいる。

「おはよう、佐川さん。」

声のする方を見れば、そこには笹原先輩。

……えっ？ 先輩？

「ちよ、えあ、あ？ 私、どうして？」

「落ち着いて、ね？」

好きな人の真っ白な手が、綺月の右手に被さった。けれども

温かな手は、彼女の気持ちをもっと混乱させてしまう。

「えっあえ、でも、その、私、えとっ。」

混乱のあまり、落ち着いて見つめることすら叶わなかったその御手を、ぎゅっと握りしめてしまい。

「えあーっ、ご、ごめんなさいっ。」

もつと慌てて手をふりほどいてしまい。

「あ、えとあう、そんなつもりじゃなくてえっ。」

目の前でいよいよ收拾がつかなくなっている綺月を、紅深は見ると見かねていた。けれども呆れている風ではなく、少し穏やかで、少し困った、優しい笑顔を湛えている。だから特に他意などないのだろうけど。

「ほうら、落ち着きなさい。」

半身を起こした綺月の右腕を、紅深の左手が捕らえ引き寄せると、付随して綺月自身も紅深に引き寄せられた。

「えっ。」

綺月があげた小さな声は紅深の右耳の真横で放たれ、気づけば彼女は、紅深越しの風景を目にしていた。淀みなく背中に戻される紅深の右腕。そして綺月の半身は、紅深にすつかり抱かれていた。

「大丈夫だから、ね？」

右耳の向こうで響くは、あのとときと同じ声。綺月が恋を決めた、あの、声。でも、全然違う。夢にまで見た、いや、夢でしか聴けないと思っていた甘い声。けれども夢で聴いたのよりずつと甘くて、綺月の身体の緊張は一気に溶かされていく。

どれだけそうしていたのだろう。綺月には五分か、十分か、もつとかに感じられていた。しかし実際にはわずか数秒小野値に、ゆるりと腕が緩み、綺月の言葉通り目と鼻の先に、紅深の笑顔がもたらされた。

「それじゃあ、帰ろうか？」

なんだかよくわからないけど、何の不思議もなく。不自然なはずの紅深との距離すら、今の綺月には自然に思えた。確かに胸は高鳴っているのに、なぜだろう。まるで魔法にかかったかのように、その返答すらあつさり口をついて出た。

「はいっ。」

秋の斜光が、すぐ隣にいる紅深の顔に切なげな光と影を生み出していった。アンバー気味の逆光に彩られた彼女の微笑みは綺月にとつて見たことのない美しさで、つい見とれてしまうとその笑顔が動き出す。

「なあに？ 私の顔、何かついてる？」

「えっ、あ、そんなことありませんっ。ただ、その、あの、」

「あー、ちっちゃいなーとか思ってたのね？」

「ちが、いますっ、だから、えと」

戸惑う綺月にわざとらしく戯けてみせた紅深は、びよんぴよんと数歩のステップを早めて、対峙。二人の歩みを止めて、くつと上目遣い。

「ダメだぞ？ バカにしちゃ。これでも私は先輩でお姉さんなんだからね？」

紅深はふふつと小さく笑いながら、くるりと背を向けて綺月の数歩先を再び歩き出した。

からかうのが楽しくて仕方ないと、彼女の背中には明らかに書いてあったのだが。現況に緊張しきっている綺月にそんなことが察しうるはずもない。もはや声にすることすらできずに口をぱくぱくさせそうな彼女にできたのは、立ち止まっている自分をたたき起こして、追いかけるだけだった。

「あ、待つてくださあいつ。」

そして一步を踏み出したとき、ブアつと強い横風が吹いた。

綺月は条件反射で咄嗟に次の行動を取る。

女の子なら誰でもそうだろう、顔を伏せながらも空いていた左手で短いスカートを押さえようとする。しかしあまりに突然の強風に防衛行為は間に合わず、パンツは丸見え。

「きゃっ。」

紅深にも見られてしまっただろうと思うと、もつと可愛いのを着けてくれればよかったと後悔しながら、その手をスカートの端に伸ばした。

もちろん紅深も瞬時に次の行動に移っていた。

しかし、女の子のそれではなく。後ろに倒れ込むようにしながら踵を返し、上半身を捻って右肩を真後ろに向ける。次の瞬間には右脚を軸に小さく左脚を振り回し、身体を綺月に正対させると、今度は左脚を着地させ右脚をアスファルトから離す。

綺月と虚空を両睨みする瞳は、先ほどまでの温かみを失い、ただ眼球が存在するだけといった無表情さである。視野の下半分で捉えた綺月は、顔を伏せ、スカートに手を伸ばそうとしている。彼女が女の子であつてよかった、紅深は予想よりも若干良好な現状に満足しながら、左脚にも地を蹴らせた。同時に、はためいていたスカートは完全にめくれ、ペールブルーのパンツが日の光に照らされる。しかし、全く気にする様子はない。

「無礼られたものだな。」

それどころか場に似つかわしくない呟きを風の中に投げると、一気に間合いを詰めた綺月の右脇に、自らの左腕を差し込

み、同時に右手は掌を思いつきり開いて虚空につきだした。

視野の上半分で見えていたはずの虚空は今や変わり果て、不自然に輝度を増していた。まるで雹が大量に降り注いでいるようだったが、その一つ一つの白い「何か」は固まりでなく、光。

光の大粒が入射角三十度ほどで地表に向かい急進している。よもや避けられないと思われる距離まで掌との距離が詰まると、紅深の目の前は黒く染まった。

彼女の開かれた掌を中心に、空間に黒い円が広がっている。魔法陣。そう呼ばれる図形が黒線で描かれたのである。黒いそれに、白い光は根こそぎ飲み込まれた。

一瞬の後に光が消え去る頃、黒い円形も消え去り、すっかり平穏な秋の空に戻る。紅深は地から離れた両脚を綺月の半歩向こうに着地させると、絡ませていた右手を彼女の腰にあてがい、グッと強めに自らの方へと引き寄せた。二人の間には身長差が十五センチあり、綺月のおとがいに紅深の形のいい頭が収まる格好になった。それ以前に、二人は抱き合う格好になっていた。

手遅れながらもスカートの端を押さえた綺月は、安堵の間もなく身体に生じる違和感に気づいた。何と云うか、締め付けられるような感覚。不思議に思いながら強風のみより瞑っていた目を開き、視線を正面に戻そうと持ち上げる途中で、予期せぬものが目に入った。

「ふえ、あ、えと。」

「大丈夫？ 佐川さん。」

自分の胸元からひよつこりと出された笑顔の前に、綺月はまた、気を失いそうでした。

お久しぶりです、Fukaponです。

次は冬コミと前回言った記憶があるんですが、何を思ったかコミティアに申し込んでしまい、こんなことになっております。

本作は来年二月リリース予定である新作（タイトル未定）のCTP（Community Technology Preview）です。某方面には便利な言葉がありますねえ。つまり「ちょっと書いてみたんだけど、どう？ 感想聞かせてよ」版であり、決して未完成を無理矢理リリースしたものではありません。……半分くらいはホントだよ？

今年の五月までは一年近く『セレクトティブ・チョコレート』というシリーズものを書いていたのですが、これは私の集大成と言うか、良くも悪くも私らしい作品でした（って、完結してないだけだよ）。その「悪くも」の部分が重度な癌だと最近気づいていまして、何とかしたいなあと思いい新作を手がけています。故に、早い段階でできれば感想を聞いてみたいというのがあるんですよね。実際に感想を得られるとは思っていないのですが（同人ピコ手の方ならよくわかりでしょう）、その姿勢が大切なですよ、多分。

とゆわけで、「このキャラはこうした方が可愛い」とか「この展開はもっと丁寧な」とか、厳しいご感想をいただければ

と思っています。ちなみに「紅深がいまいち可愛くない」と「話の起伏が乏しい」ってのが私自身の感想。セレクトチョコとあんま変わってないな……。

早めですが、今回はこの辺で。

次回は冬コミ、多分また、読むに耐えないと言われている漫画を描こうかなと。衣装が間に合うかってそれ以前の問題もあつたりするんですがねえ。

二〇〇七年十一月、日光処女のサンニツパが置かれた作業場より。

それいゆ(仮) Community Technology Preview
Fukapon

2007年11月18日 初版発行

発行所 まにふいくみやはか
印刷/製本 project KAIGO 東川口分室

Copyright (C) 2007 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>
<http://www.projectkaigo.org/>